

# カイコバートの「意図」のお話

2021/12/06



今日は、雨です。今週のNHKの講座はリヒャルト・シュトラウスの《影のない女》の最終回です。先回は、やっと影が手に入るのに、「私の幸せのために、人間を苦しめてはいけない」という皇后の「人間的な思いやり」で影をあきらめるところまでみました。でも、影が手に入らないと愛する皇帝が石にさせられてしまいます。この「皇帝の生命か？ バラク夫妻のしあわせか？」という、父カイコバートとの「ネゴシエイション」（交渉）で、皇后は人間の幸せを選んだ判断は、果たしてただしかったのでしょうか？

ホフマンスタールの台本には、なんら特別な「プロット」（伏線）も置かれてなく、この二者択一を解決する大団円は、説得力に欠けます。結局は、カイコバートの温情で、皇帝も石にならず、簡単に許されるのですが、最後に、台本作者自らが出した問題を演劇的に解決しないままで終わってしまいます。ただ、乳母が追放になるときに言った、地獄の使者の台詞「いったい、お前は何を知っていると言うのだ？ あの方（冥界の王カイコバート）の意図と、お嬢さまを試した真意について」がヒントになります。

私は、この台詞をミスっておりました。すべて、一連の物語は、すなわち、「娘が人間の世界に憧れて、霊界を出たがっている」、なぜか？ その娘の気持ちを霊界の王カイコバートはよく理解して知っていたのです。「霊界には死んだ血も心もない冷たいモノしかいない。生きて、生活している人間とはどういうモノか？」を娘は知りたかったのです。すなわち、娘は、他人を愛する「愛」の存在について、霊界における冷たい「死」ではなく、人間界の温かい心の籠もった「愛」について、「愛とはなにか？」が知りたかったのです。「半分人間である娘には、愛とはなにかを知る権利がある」とカイコバート

は思ったのです。それを教えてやろう — というのが「あの方の意図」でした。カイコバートが、「お嬢さまを試した真意」は、娘自らが愛の尊さと人間の尊厳について知ることが出来る「心」をもっているかどうかを試すためでした。

「この物語は、すべて、カイコバートの意図で出来ている」と早い段階から私に教えて下さっていたのが受講生の佐藤剛さんでした。佐藤さま、ありがとうございます。でも、ホフマンスタールは、この最後の娘＝皇后が決意した「理由」についてはなんの（案）もだしていません。結果としては、カイコバートの判断でハッピーエンディングで終わったものの、そこにいたる「皇帝か？ 人間か？」という皇后の判断が正しかったかどうかについては、いまだに、分からず仕舞いです。残念です。そのことについては、リヒャルト・シュトラウス自信も物足りなく思って、ホフマンスタールに手紙を書いています。「皇后が自らの人間性に目覚めたことにのみ心を奪われ、染物屋夫婦の悩み苦しみだけを考えて、皇帝のことをすっかり忘れてしまっているというのが、どうもピンとこないように思われて仕方ないのです」「さもないと、皇后にとって、なぜ彼女自身の幸福、皇帝の命よりも、バラクの幸福の方が重要なかが、誰にも分からないのです」。

このリヒャルト・シュトラウスからの問いかけについてホフマンスタールはなにも答えなかったようです。結局は、「機械仕掛けの神」の登場です。では、木曜日にお会いしましょう。《影のない女》のあとは、愉快的オペレッタ《青ひげ》です。それまでは、心安らかにお過ごし下さい。 都築正道